へ13
3396
1

門へ13
3396
巻子

和漢御書物所
越後柴田上町
新津屋太兵衛

小田嶋

千代物語 全叙

月日の常なる明なるを欲せども浮雲
是を掩へ河水の青きを欲せども
ども泥石の濁れを揺す人情の
平なるを欲せども嗜欲其本を害と
いえども生涯の日と雖

雑巾の水を掘て人命停
ざるの山水ふるさと今日へ存といへども
明るく赤保ぐ〳〵埋せの消て存ずと
和るのぐら己が身と顧ざるへ悪鬼生
徳の凝会ふ結つく驚とまう悪魔
礼義悪兵を好く絆とまう彼を

怒を集を餐として俗の茶墨山時ほ
其の要を積る茶風ようも刻く駛ようも
解して御ろ名利の清渇と知ひ拝現
茶の味ひを解るまふへ悟ぐ〳〵百年の
茶茅風茶ふ博ぎるそや

丁亥孟春　東里山人誌

千代物語目録

○壹の巻

一　千代女まひ立の事

附り比叡の雪花の事

二　千代女大門家へ貝見の事

附り戈の聖山賞美の事

○二の巻

三　桂鬼賈右エ門恐汁の事

附り釜川と赤むくの事

四　釜川義金の妃を求る事

附り岩田の庄郷千石の事

○三の巻

五　千代り老婦を遊る事

附り悪顔の老婦を太妃の事

六　千代り播列室の沸ふ事

附り扨君尾上ゲ事

○四の巻

七　建部永三郎室の沸へ通る事

附り千代り袖云の事

八　千代り身の上の大事を信る事

附り扨女尾上自害の事

○五の巻

九　千代り女初ふ乗舟の事

附り母恋縋を云ひ事

十　建部永三郎海辺へ沉む事

附り尾死を遊る事

赤松家一番中
建部永三郎房清

摂津国住吉浦
船主伊与平娘
千代女

大内黄門義良
義隆の家臣
妻川導忠友兼
隨世
似右望
背俗
如狂人

同藩
桂鬼雷右門定是
性哉
憂浮世
何處
寄此生

播州室津揚屋
高砂屋尾上

一顧傾人
城再顧
傾人國

千代物語巻の一

月岡 錦

○千代女生ひ立の事
附り 出家死髪剃のる
○千代女大内裏へ見のる
附り 才智巧賞美のる

山陽奇談　千代物語　卷之一

東都　鼻山人　著

一

笹川千代女生立の事

附り比類なき死刑の事

戰國策ふいに曰く太山は土壤を讓らず故に其の大となるを成し河海は細流を擇まず故に能くその深きを就り王者兵庶を却ぞけ故に能く其德を明らかにせりとや爰に摂津國住吉の

邊りゝ伊与平とて僅うある商るひゝて妻を淫るものあり〻頃い永孫のまゝ舶ゝて豆利將軍家の釜威日〻ゝ搬〻やゝて五家七道の〻〻奸雄蜂の如く起り凡のごくゝ割〻四海悖らく〻靜あらず此伊与平も元来四國ゝく発ぐき者なりしが乱世たる妻の中ゝ家郎義田烟とても愛ゝゝあらば今ゝ人安〻家産坊を仕出とて〻〻田畑い皆貴代なりして

千代一ノ一

世れ少て子石積の船一艘を求め家伐什具を乗載せ〻四季の供物朔夕の営むる豆程ゝして其多い妻と水夫ゝ船頭ゝ人四人ばかり伴ぐ宝ゝぬ波のゝ人を仮家として難波堺兵庫室牛窓の津〻浦〻より四國九國の湊〻茶報の積送り法〻の在物あるひい軍國の糧米などを運び朔夕をゝしが巣よりゝ〻船天命すぐて一人の娘を儲ゝ名を千代とぎいひゝるゝ子孫や天のなもる葉繁懐

抱の中より小夜の梅のまゝ角ひ[illegible]菊のすゝ
婦始なるのゝ[illegible]ず上郷ハ移らずとやらん一ヶ所にて
十を新るの孫明るも父母まふよう徒しくれば家
ゝ死るもせず悔るべきるもなしいゝゆゝく係う
子の出来る我ゝとゝるく寺持のおひを迎ふ名う
伊与平も信思急するふ我生来早くくれども影
乱をする要ふ生れてハ数あるぬ者も時を待らんふ
案ゝとハ一郎一孫のまとゝもありて子孫の名をも

孫をもの例をゝ[illegible]ゝ中ふ係る徒しき
仕業をる此多ハ郭てゝも山をほゝかく常代の子孫
いゝでハ義家の中ふ妻育て紙の海士の仕業をば
あらはすべきあり是係りを求めて妻ふあるゝ人ふもふへう
解命を楽ゝむ力とゝも迎てんと妻と示ゝ合せよ紀
係りやあると結ゝ者ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ国山口の面影
大門黄門義ゝ良義隆と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
中ふ於ゝく世家の繁ゝ[illegible]双びなく其元義真の[illegible]

代より平安城の古風を改め西の都と
時めきて威名西海に曜きるが故の幕下に
源川源氏忠友兼といひる者一とせ義隆の使
として京師室町将軍家へ系のゆるされかの
ふ代ゲるを伝へ聞きて秋ふるあられば此子を
貰ひ受く家門相続の約束ゆゑ伯父伊与平
が弟にうあく猪名れが孝ふ望むにとて子代
七歳の夫源氏方へ送りる源氏いうぎり

あく悦喜て防州へ使ひ遣はしまゆ渚とも掌の
うへの玉と寵愛等閑なりしだふ又あれ
ば如なりるふ今へひ習ふ家の道糸竹の業までも
ふまうせく朋友慣らせしうびその沢近国ふ隠れ
なき奇童安とありふるされば源氏まゆ程
なく美しくるる程ふ七つの比もやるて
八つの秋八月十五日山口宮八幡ふの祭礼あれば
此日祭りの移り物ふせんとて家の子八尾太義と

いくるたとへき年寄ふ毅虫させ婢女等るめこと
流くく出〜くるふ年〜のるるあぐら分て今来ハふ
又物の人鬚〜くた右義ふ騒の子を散〜さる
如く嘶〜法〜出〜行う物ハ喧〜きまでふ入るも
出るもんふまるもず去義ハふ代ぐ身のうへ苦ぐと
紙事の方〜ハ見もらず毅虫〜て又喬るる仮ふ
義ふへりぬれぐちの張ひ骨ふ法〜て雑を立べき
地もあるれぐコハ鬚〜きさ又物ぐとんふあぐこ果て

風ふ尾光の特ふぐ〜く押合押合ます中ふたち
まち砂煙ろ今〜を暗まし〜てソレ喧嘩ふ狼籍者
よと噪動〜て右往左往ふ人波をうち血来ると
壮年ハ群集の中を踊り跳て我待と逃るもあり
あるハ絲ぐうふ躍倒されて事乱ふ絲ぐ
苦〜むものもあり中の混雑ふ狂瀾てられて新へ
子を又見るのひろハ新ふ別れて泣叫ぶ張く
惜れふ我ゆの〜るひと死去義も群集の中〜とり

国まれ[illegible]人の娘と押隔てられぬべきやせ[illegible]かくやせ
まゝと有へ押分たり〳〵接切て血脈とあり彼の[illegible]
和ふ信せ〳〵婿女[illegible]もよう〳〵ふ延葉して[illegible]ひ
[illegible]君いうふ何方ふ和ふまるぞや流〳〵ふ[illegible]ふと
[illegible]立れと言ふ人もあらざれば義い[illegible]の
ぞくあるこの人立まるこの接義とうるぐ〳〵我
[illegible]ぬれとも絶隔もえ〳〵ざれば是非なく[illegible]
[illegible]立ゆう流〳〵那とぞ

[illegible]れば母ハ大きふ悔乗じ義ハ面目ハ上ずず
婢どもを呼出てるのを[illegible]ぬるふ包まずして
在の侍ふ流うれば母ハ奥ふ見えてコいふ奈何ある人
ふの奪ハまゝやト見も拵ぐろふ紅のく失トふかくと
告れば猛ふハまとも課ずハて楽んで凌らんと
一向[illegible]ふ稼ぐ母ハいふ〳〵奥を見え〳〵ねこるを作ハ
ぞやせめて十ふ十ふあるあるふぶ拵れト家を[illegible]
稼てゆうのやせん絶をうセッヤ女の初雅のぐ[illegible]

この源氏ふ物がたりも名高ひべきモシ成らずいうべいせんと
餘多の僕ふいひ合わせ義を先ふ立て此ふ
三つの月ぶふ弱ぬべ〜モシ成て後是来らずば
物の是笑も乗じ出ち成べく成る為と義らふ角言
び時物のひ〜ふを配して立出るまづ山口の町〜ふ
いつのふ物ぶず変彼ふのち境あるひい遊林の中
まづも狩うあく歩行ども〜行るふも
ひとぶ是形あくその夜の明々後一統ふ立成べく

今ふ於方あ〜兎角ふ清面敷〜行えるひて公の
ふ威光をのつと国中を弱ぬさせのくとトいくを
毋ハ泣〜逆ふ向って郭といくまび逆ふい特〜
幸色もあく無川ともいるる侍士が娘をくふらを
つまづう変化のものふ捕まづう行為ふまずト面
形へ海法ふ物のをんるり家つの名物まの和あり
出るの作ふ捨垂のくくあまるね童女ものれば
結ものふ海う来るうトいるう物ひるる色あるれを

母をもてやうなれば宮まゐりなども永の
父母の年へ侍とうべき親もはしりや伯國の世山
ゆも捨られ人賞物かどこにのもあも活らべいうある
うれめやや垂べき兵部をまげて公義の御法に及と
たまへれる日数多のべ彩を求むるよすがもある
まゝ所多の僕が経験も世母ら世ゝをもゆしへ
物のひまり多人と泣口説ども兎角ふ歌きをゆめて
子代が始をゆるへトいふもそ母も力ゆるべと又く

人を出して尋ねさせる話ふ代い甚疲へど
しんぐ名ご丈ふ殺害せるふ形集の中も人絶ゝ乗り足場
して金人会多九州ふ言ふ九州より流りたる人賞の
貢ゝ米螺殻の舞ゝと呼ゝ嗜味の老ふ代が
髪の飾り金銀を縫めるるとうゝていろ母後き老の
子ともうゝどそのうへ未ご初雅ゝれども容貌尋ゝ
あふべ世ふべ盛ゝ都の人ゝ賞代ゝ又へ
江口神崎の抵女面ゝ流ゝものべあるの徳ふを

ぶさーとゆのひ俄うふ喧嘩ふるの事て群集の人を
驚かしその騒動ふ事ーてそんの後ふ代をうそひ
揚屋車ふ乗ゝく群集の中をよゝくこ分をいで
逸足出て人少なの北方へ松吹風のさゝくと走り
去ふふ代い屋ふ居ふ後ゝ国へ行まゝ形ぞ
後ーふ郭へ走ゝぞとゝくど業躍先いものをもゝまず
先の方へ逃げふふ代いまゝ勢急かーとそれを
追ふ我をかどゝし形さゝるもの老ゝのトさゝろ付ぐ

悪ふふ声を立ゝべいゝゝあゝ此見ふや重ゝの人ゝ
如何せんとゆのひゝゝふ先盗人の見ふ行くべき物を
ゝり屋さんト撃ふさーたる勢ふど抜く懐へ屋ー
紙帳もあらべ飛ゝて逃ゝとゆゝどまも幼稚ふ
ゝれべよも逃をまーゝ亦やせん角やせんトゆゝ一松ふ
向ふの方より金形の上清よとゆゝーゝ信ゝ作
抜灯燈ー任ゝ金張ゝたる車ふ乗ゝるゝ者ふ
ゝり物の後ゝさトゝくてをさゝく形遺ひゝ

ちよめ
千代女
幼稚を
ろんせの
現斗して
きくたん
毫雑を
毎く

僻めへ行恵と母とは逃げ去り逃げ去り見物の
彼家物と跳跳て行むとするとき千代へあまたとそ
そ[illegible]の上と肩の上より飛付く家物の様奥へ
飛とさらく声をそろふ人賞ヨ盗人ヨ幼少き者共
かどろこして行ぞく助け給へと呼ぶ家蝶見へ
物のひも奇ず行を洗ひ千代をば捨置
一さんふと逃行く逃行くその比新参の乳母
大人も地ものべざくき

二

千代女大門の函形に同えのる
傳ゝ戈智を賞美のる
話況もくぶんの僕人ちもふ千代が欲きふ行を洗ひ
コハ〳〵尾〳〵悟我ばせねうと拘き記せば家物の戸
押開〳〵あるるくと拘きどう拵子いろふとありられば子
代へちとほ世ふひを拵ふ家人何某が娘やくひが
今日家の子ふ供られ乗り又物ふ乗り出お母様も
恐惶ふかどろされひまくその雑家を逃れたさふ

浄瑠璃

浄瑠璃を稽古しまつくるるの事は兎角されもきれいとかくれば此上無の大門家筋の面形ふ
仕へまる相撲の力といへる方あり死骸ふ
子もあるものゝ去あそもの音曲能取まつる
るの仕合せ事は面形まで仕るへく後
地獄の家をも尋ひて送り帰りまぐらへイザ出方へト
吾嬬ふうち案内取く面形くこれを帰りるかと
いつものわよりふの方の浄瑠璃ふまいり仕るもの

青山の娘一人拾ひ捨てひろ書くらずば
まみへさせもおりませしトヤ月見ば若れいろふと
同のふ和歌ありの絵ふ中上見ば生方へ見せと
宣ふ迎へ月姫てよ代ぐを持ち絵ふ出んまると
よ代い月の袖をとりて少しの袖ふのへとる紙の
月ざより小さき鏡をを出し持ちて又懐中
より鬱をさり出して元の通ふ髪ふ整イザ
まつりゆんむとつのふ是をえる女房達仕るものと

あ〜如さう〜義経やとて皆一同に感じ合ふとそれ
より局の御ふ付きくれの方の御座の縁の付きふ
ふを使うて者うるふれの者の者に者の子を伯とそ
局ふ付きられまのしぎと寄ひまくべ御家人義川
源ゑ娘ゑ代とやて今年八つふまくのがまう〜の
次第まて扱ふふずもを御前までまのりゆるの妻と岩れ
多〜くゆくどの意き英雄を通れて係る中巻〜の
伯を書るる中偏くふあり雑き者ひとそぎ〜

の〜ト義吉と申ふやるあどれの方伯のなまひて
伯ふ義川ゑ娘るふべ義て伯の〜ふ猪るのよ吹〜
の女房達を呼出〜るひて係る子を持さらん親ふ
義ひしう是〜かるべきぞ時〜が程山垂て父ゑのとく
送つ者すべき伯猪る〜伯ふあても持貴よと宮〜ゑ
能多の女房達扱ひ〜ふ帷子ヨ獅猪ヨ薙る〜
紙あるひふ種〜の菓子るど持出〜て子代ゑさう
伯ぞ勧めるふの方ハまよう面歌義隆公のをん

第八まつりの人係る者と共に手と宣へば面
形も若れ百せョ車ふ人と宣へども方色彩
とも相ぐして浅黄ふまつりの娘のごとくかと
る〜ものふまれば面形ちまきふ色もの人係る
黒漆の車輪を付けたり吉もさもさうの
造紙をごと形近く入り来て人の傳うをすること
吾改道の所かぶるふ係るなり色〜有冠中し
付けたりの造紙を詮考る〜汝が父母のらうを

晴きんと仕あうるれば代中クスモレその造紙を
浅吟味しのふんとるふべ容易うるべきうとそゆく
くぶんの曲ものの吾俤を有ふ勢さ〜ひ節人の
ちちふ人賞の彩と親令〜たあふべ後日ふ件絵
美のひんふもの俤ともるうるんと喜ぶ彼の和ふ
せ〜綱き針ふ色糸の付うると寄うふて曲考ぶ
帷子の衿ふ針のうくね程ふさ〜車ひが身の程
のるふてひえびまぐ山うあうぬべ〜その手を俤ぶ

ゆ琴をひいて居迄あるほどくとやけまぢ色うく
ゑをハタと折るひて佐も帝代の戈女うゐたあくび
るゆ延くくふまぢうびとて歯ふちまり鐵雑井敷る
トいくるを京ちく青ホ家人の娘をかどろ迎てる
傳若ゑうくの京あるべうれぢその者を捕出す
ぢくと行あるふ殺る長りちう伝前とち出るゐ
傳る塗飛をいじて色敷ゐくく色されう
うんと文ふんるねど下同の者京くく出くて影トや

後世び皆くかとまうて数千人を配ゐくくるの
村里寺社までも扶りひくくホ尋ホ孫ゐる程ホその
墅日結山といる山の棒ホ酒賣家ありゐ彩ゞ
其の門ホたくまくゑ男七人まで集り居てあゐ然
書ホ酒長前後も去ぶ伏ゐるもあり記さ彩も
あり拝ぶ中ホ紋業螺殺の難ホ人の上ホ座くて
ゆゞクァの者ゐホ徒働き仕出くくおりひの外あホ
忍くゑ小女もあるのゐ我ホまで危き比相ゐ

同じせうくもくもの会あり。と俗うと宮の
より商人の中ふ姿を窺て来り居る紙子ども
千らと俗の多く俗に三の死風情にて酒賞居たら
何ふふ彼男が袴より色糸二筋三筋かくまるく
形ばかりの俗を立出びて紙子ども（形と
相図をまれば多彼和より出び出て一家に動と
延ばうと歌の上ものぞ物の言ふ一人もて
動くると変をまたく打まるり〳〵と

掴み捕く雑井殺言が米ぬぞ引出〳〵る雑井
一〳〵拷問〳〵ふ米螺売ふ代を盗み〳〵
人笑の〳〵白状す〳〵ふ狂る古人も是まその強
るものと書く形ばかりて一人〳〵貢をぞ別られ
ける俗その后歌ふる代を石〳〵て宣ひる形へ
海が野〳〵き智暗めて堂織も速ふ石〳〵丸尋ふ
家の女親ハ泣〳〵尋ねびて歎き居よと損侵
の居ふ命ぞと引ふまち侍二人呉源と稚〳〵の

場のあるが中ゆの義僧考ふ看経佛ゆ安置
志ゆゆ和の伊長こすしたりある京洞の文殊佛
の彫像をあり雖くも下し並れ多るをも〳〵
文殊菩薩ハ智恵を司どりまゆ佛なれば是
又ゆ代が幼智を磨き〳〵ゆ人なりとて話説
源氏が妻ハゆ代が家ゆ戻りをゆて記〳〵
人の義ゆ多るゆ花しゆ且強き且飯盛屋の
名ゆ対向ひてハゆを合せて伏拝〳〵涙ゆ

むせびゆる源氏ハさんざ我ゆの泣めよう
朝もあるべしと抱ひ宥めつゆ家ねるゆ抱よ
ゆ〳〵ゆ中ゆる云沼のゆ〳〵いふ〳〵といひゆれど
家人をゆ〳〵ゆ一統ゆ皆源氏のゆどゆ
まゆぶゆと感賞〳〵ゆるゆれば代ゆ後ゆ八ゆて
今殺の勢強豪用いゆある母女の義姉ゆとゆ
人舌を巻てゆ忍義ゆ〳〵ゆる是より光源氏を
ゆ〳〵ゆ如人ゆちゆぶひます〳〵京名主近ゆ

千代物語卷之一終

東京帝国大学図書之印

五代一ノ十七